

〔大会記録〕ワークショップ

資料のデジタル化から出版まで

——貴司山治日記を事例に——

一 はじめに

立命館大学では、多くの貴重な資料が長きにわたり収集・保存、研究されてきた。それは資料を調査し、研究に活用する素地が形成されたとも言えるだろう。それらの先人たちによって培われてきた「知」の財産を、いかに受け継ぎ、次の時代につなげることが出来るだろうか。

本稿では、外部資料を借用・デジタル保存し、出版へとつながった事例として、プロレタリア作家・貴司山治（一八九九—一九七三年）の日記について報告する。筆者が本学大学院において、資料撮影や研究会活動に関わり、その後担当編集者として出版化した経験に基づくものである。

また、研究機関におけるデジタル保存と出版活動の連携についても考えてみたい。

二 資料の委託

白 井 かおり

二〇〇七年、貴司山治の子息・伊藤純氏より計五五点の日記や取材ノートを受託する。そのきっかけとなったのは、徳島県立文学書道館で開催された「昭和という時代に生きた作家 貴司山治展」(二〇〇六年二月—〇七年一月)である。¹⁾この展覧会で貴司の原稿や草稿など膨大な第一次資料が公開され、その生涯と文学活動が明らかにされた。なお、日記群は、本学図書館貴重書庫で一時保管されたのち、この徳島県立文学書道館に寄託されている。

ここで簡単に、貴司山治という作家について紹介しておこう。貴司は一八九九年、徳島県鳴門に生まれた。本名・伊藤好市。大阪時事新報の記者、通俗小説家を経て、一九二八年、日本プロレタリア作家同盟に参加する。つねに創作活動を主軸とし、『ゴ—

・ストップ」(初出「止まれ、進め」)、「舞踏会事件」、「同志愛」などプロレタリア大衆小説を執筆公刊していく。治安維持法違反による数回の勾留、作家同盟解散によって、情勢が厳しくなったのちも、東京地下鉄争議関係者との文学サークルや雑誌『文学案内』(一九三五―三七年)の発刊など、大衆との連帯のかたちを追究し続けた。また、戦時期には、内モンゴルを旅行、その後京都府胡麻郷村に疎開して開拓に従事した。戦後は、大衆小説を発表するかたわら、雑誌『東西』(一九四六年)、『暖流』(一九六一―七三年)の発刊、小説配信を専門とする通信社「作家クラブ」(のち「文芸社」)を設立するなどジャーナリストとしてもその手腕を振るつた。

受託した五五五の資料は、貴司が徳島を離れる直前の一九一九年から一九六八年までのおよそ半世紀に及ぶものであった。市販の自由日記・当用日記が大部分だが、一部断簡となったものもある。ただし、これだけの日記を残しながら、プロレタリア文学運動にかかわっていた一九二八年五月から一九三四年三月二五日までは、意図的に記録することをやめているため日記は存在しない。

また、日々の日記以外には、一九三二年に起きた東京地下鉄争議の関係者に取材した「地下鉄争議ノート」(一九三三年)や、戦時期に内モンゴル・華北地方を旅行し、その行政と風俗、要人との交流を記録した「蒙古日記」(一九四三年九月―十一月)五冊もあった。

三 研究会の結成

こうした貴重な資料が人目に触れないまま劣化し散逸することを防ぐため、そして膨大な資料を体系的に閲覧できることから、すぐにデジタル保存が検討された。

そこで、資料の保存・公開を目的として、「貴司山治研究会」を結成する。この研究会には、本学教授の中川成美教授を代表として、貴司山治子息の伊藤純氏や、プロレタリア文学やその周辺の作家を研究する院生・学部生、卒業生らが参加した。その主な活動は、資料のデジタル化作業と研究会活動である。

資料のデジタル化作業は、二〇〇七年一〇月―〇八年三月にかけて、院生・学部生の有志によって行われた。

こうした作業と並行して、研究会が月に一回開催された。二〇〇七年六月から〇八年七月までに一二回開かれ、貴司山治の文学的・文化的価値の調査として、貴司山治作品を輪読した^③。現在、プロレタリア文学研究者はそれほど多いとは言えない状況にあり、貴司山治研究もそれほど進んでいるとは言いがたい。しかし、幸いにも本学にはプロレタリア文学を専門とする院生・学部生が多くいることから、貴司山治だけにとどまらず、文学運動やその時代を知る上で重要な資料であることが再認識された。このような研究会活動を通して、デジタル化する意義が明確化され、公開の必要性を共有することとなった。

あらためて受託した貴司山治資料を見てみよう。日記は日常の雑事を記録したものであるから、個人の行動や思想を捉える上で重要な資料である。しかし、貴司の日記は検証材料としてはもちろんのこと、「日記自体が一種の自己表現、自己表明の『作品』⁴として意識されて」おり、後世の人に「議論をふっかけている、という趣が強い」と伊藤純氏は指摘する⁵。

プロレタリア文化運動や当時の思想や世相を考察する同時代資料としても高い価値がある。例えば、一九三四年三月二六日の日記には、プロレタリア文化運動とそれを取り巻く状況が詳細に綴られている。それは四〇〇字詰原稿用紙にして一〇〇枚近くもあり、日記を書くことができなかった六年間の空白を埋めるかのようである。また、のちに伊藤氏によって、プロレタリア文学作家・小林多喜二の死後刊行された、『小林多喜二全集』の編纂過程が、日記の記述をもとに解き明かされている⁶。

同時代的資料として歴史的瞬間に際した生の声も表された。二・二六事件が起きたその日の日記には、「われ／＼は東京に住んで、こういうことに近頃馴れつこになつて驚かなくなつてしまつたが、もう少し事の本質に対して敏感にならなければいけないのだ。(中略)この事件で、憲法が停止されたり軍事政府が出来たりはしないが、合法的にファシズム的政治段階へ一足飛びに行つてしまふ」と、戒厳令下の東京の様子が記録されている。

四 資料の公開、出版へ

デジタル化が完了すると公開方法が検討された。関係者だけがデジタルデータを所有しているだけでは活用される機会が限られるため、出版化へと話が進んだ。翻刻・影印本では膨大な時間やコストがかかること、あわせて、貴司本人や代筆によって浄書されたことで文字が比較的阅读しやすいことから、DVD版での発行ということになった。

出版にあたり、プロレタリア文学専門の研究者だけでなく、多くの研究者が活用できるよう、編集する必要があった。筆者は当時、近代文学や近代史の雑誌や資料群の復刻版を主に扱っている出版社に勤務しており、このDVD版の編集担当となった。

先ほど述べたように、貴司の資料の中には、日々の日記のほかに、取材ノートや旅行記も含まれている。加えて、膨大なページ数のため、日々の日記を貴司の疎開した一九四五年を境に二枚に分け、その他の「地下鉄争議ノート」「蒙古日記」をそれぞれ分類し、DVD四枚に収録した。

画像の収録にあたっては、資料保存の観点から撮影された白紙ページも、読みやすさを考慮し削除した。また、日記は、日常の記録や心情を率直に語っているところが魅力のひとつであるが、同時に他人のプライバシーを侵害することもある。そのため、犯罪歴や病歴に配慮し、該当箇所を伏せるなどの処理を施した。

さて、膨大な資料集を利用するとき、最初から全部読んでいくよりも、目次や索引などをたよりに目当ての箇所を探し当てることが多いであろう。この機能を有効利用できるのがデジタル出版である。

貴司山治資料のDVD版では、簡便に閲覧できるよう日付検索と人名検索を付すことになった。日記という資料の性質上、日付検索を付けることは当然有益といえるが、さらに人名検索を付したのである。貴司山治の取材先や創作活動を追うことはもちろん、同時代に生きた人々の様子が間接的に調べることができるからだ。日記には、小林多喜二、中野重治、徳永直らプロレタリア作家だけでなく、戦時期に情報局情報官として言論統制を行った鈴木庫三、読売新聞社社長の正力松太郎など多彩な人物が登場する。その広汎な人名検索は二万五千件にも及んだ。

製作にあたっては、日記本文をすべて読みこみ、名前と日付を抽出している。ペンネームや婚姻などで複数の名前を持つ人物のためには、「統合氏名」欄を配した。どの名前から検索を行ってもすべての名前が表示されるようにしたのである。このような方法もない複雑な作業は、研究会の方々のご尽力による。

その他、冊子体の『貴司山治研究』の編集も行った。これは、DVD版の案内書であるが、貴司山治の研究書としての役割も担っている。

貴司山治は、プロレタリア文学の研究において論じられることが多かったが、この膨大な日記群を前にしたとき、その枠組みみ

けでは捉えきれないと考え、中国自治領の研究をされている森久男氏に「蒙古日記」の解説を、農業史の研究をされている安岡健一氏には貴司が疎開・入植した京都胡麻郷村での戦時・戦後の開拓運動の解説を依頼した。これらのさまざまな観点から貴司山治資料をとらえることで、活用のをあげようとしたのだ。解題には、貴司山治研究会の結成から関わってきた、本学出身の研究者が担当している。解説・解題のほかに、関連の資料も収録した。

このような編集をへて、二〇一一年一月『貴司山治全日記 DVD版』が刊行された。そして、大学図書館・公共図書館に所蔵され、多くの研究者に活用されている。

五 おわりに

「立命館の『知』の財産——資料発掘・整理とその研究」というテーマのもと、資料のデジタル保存・出版の一例として、「貴司山治」という作家の日記について報告した。このような実績が認められてか、現在も本学で貴重な資料を借用し、デジタル保存が進められている。

作家や個人所蔵者の死後、資料が死蔵・散逸することがしばしばある。資料的価値を見出されたものが、出版を通じて公開されることが今後の研究活動をさらに活発化させるのではないか。

最後になったが、ご遺族の伊藤純氏をはじめ、緻密な作業を長期に渡り行って下さった研究会の方々なしに、この出版は成し遂

げられなかった。記して感謝申し上げたい。

注

- (1) 出版までの経緯については、中川成美「文学者・貴司山治とプロレタリア文学」(『貴司山治研究』不二出版、二〇一二年)に詳しい。
- (2) 貴司山治の生涯については、『貴司山治研究』(不二出版、二〇一二年)の各解説・解題を参照した。
- (3) 詳細については「アート・リサーチセンター研究活動報告 二〇〇七年度プロジェクト報告」(『アートリサーチ』九号、二〇〇七年三月)を参照されたい。
- (4) 伊藤純「貴司山治日記の概要」『貴司山治研究』前掲書。
- (5) 伊藤純「小林多喜二全集の編纂過程―『貴司山治日記』にみるその表裏」(『立命館言語文化研究』二三卷三号、二〇二二年二月)、同「『小林多喜二全集』の編纂過程(戦前編)―貴司山治資料などからの検討」(『フェンスレス』創刊号、二〇一三年三月)。

(しらい・かおり 本学研修生)